

# 貸間を探がしたとき

小川未明

青空文庫



春の長閑のどかな日で、垣根の内には梅が咲いていた。私は、その日も学校から帰ると貸間を探がしに出かけた。

その日は、小石川の台町のあたりを探がして歩いた。坂を登って、細い路次ろじにはいつて行った。赤い煉瓦れんがべい塀いについたり、壊れかけた竹垣に添ったりして、右を見、左を見たりして行くと、ふと左側のすぐ道ばたの二階家に、「貸間あり」の紙札が下つていた。

私は、先まず外から立ってその家の有様を眺めた。古い家で、四

角な、そう大きな家でなかった。そして、二階家といつても非常に低くて、背伸せのびをしたら、二階の内部が往来からでも見えそうであつた。思うに、その家は、可かなり低地に建つていたものと思われる。何しろ、私が学校に行つてゐる時分のことであつて、もうかれこれ二十年近くの昔になるから、はつきりとした、その時の印象が浮んで来ないのに無理はない。しかし、その壊れかけた垣根のうちから、外の方へ差し出た梅の枝には、ぽつらぽつらと白い花が咲いていた。

私は、とにかく入つて、その室へやを見ようと思つた。そして、入口から声をかけると白髪しろがの爺さんが、庭先に何かしていたが、「どうぞおはいり下さい。二階ですから」と、言つた。

私は早速家にはいつて二階へ上つて見た。畳の汚れた、天井張りの低い六畳の間であつた。外から見た時には、南に縁側がついているので、暖かそうに、日がよく当つていて明るそうであつたが、室の内にはいつて見ると何うした<sup>ど</sup>ことか、陰気で、暗っぽい感じがした。しかも窓が、東の方にも付いていたけれど、どういふものか気持を引立てなかつた。

「この室には、はいる気がしない」

私は、ただこんなことが念頭に浮んだ。そして、爺さんが静かだとか、日がよく当るとか、学校にもそう遠くはないと言つたことなどを耳に聞きながらも、私は、しばらく黙つて考えていた。

「また、よく考えて来ます」

こう言つて、私は、その家から出た。そして、他にも、貸間は  
ないかと、方々探がして歩<sup>あ</sup>るいた。他にも、好ましい家はなかつ  
た。しかし、私は、思い返して、二たびあの二階家へ行つて見る  
気は、どういふものか起らなかつたのであつた。

ある時、Bの室で、二三人学友が集つた時、貸間の話が出たの  
であつた。やはり、みんなも貸間を探がしていたと見える。

Nが、電燈の下で、眼鏡を光らせながら言つた。

「台町になら、一軒二階で貸間があるんだ。まだ、きつと開いて  
いるだろう。長くいるものがないのだ。ぼくの友達も、あすこへ  
行つたのだ。移つて行つた晩だね、夜中頃に、ふと眼をさますと、  
女が室の中を歩いているのだそうだ。青い顔をして、俯向いて、

隅の方を足音を立てずに歩いているのだそう。友達は、自分は、夢を見ているのではないかと、気をしつかり持った。しかし夢ではなかった。自分は、幻想を見ているのではないかと考えた。しかし、眼にはつきりとその女が見えた。友達は、恐しくなつて蒲団を頭から被つた。そして、夜の明けるのを待った。

夜が明けると、もう、一日もこの家に居ることができなかつた。それでね、早速荷物を片付けて、前の下宿へ帰ろうと思つて、そう断ろうと梯子はしご段を降りると、爺さんも婆さんもいなくて、二三人の女の子がいた。仕方なく、その女の子に話すと、

『やはり、何か見えませんでしたか?』と、女の子が言つたそう。

『じゃ、僕ばかりではないのだね、この家へは幽霊が出るのかね』

と、友達は、聞いた。

女の子は、笑いもせず、じつと友達の顔を見て黙っていたそう  
だ。

友達は、すぐに、その家から越してしまった」

私は、この話を聞くと、あの二階家が目に浮んだ。

ほんとうに、そんなことが、この世の中にあるのだろうかと思  
った。

一、二年後であつた。私は、其処そこを通ると二階家が見えなかつ  
た。垣根などが新しくなっていた。その家は、壊されたものと思  
われた。



私は、この世の中に「妖怪」の存在を否定する何ものも自からみず有しないかわりに、また、「妖怪」の存在を肯定するに足る程の実験にも触れて見ないのだ。けれど、「妖怪」以上の恐怖すべき光景に接することがないではなかった。

この一つも、やはり、学生時代に、貸間をさがした時に見た、光景の一つである。

関口の滝の附近に、黒く塗った壁板には、武者窓が附いている、古くからの家があった。しかし、それが外部から見ても陰気な二階建になっていた。一軒の前に「あきま」の紙札が貼られていた。

私は、ここンではいらなければならぬ、くぐり戸の外から、

「ご免下さい」と案内を頼むと、「なにご用ですか」と、つんけんどんな、婆さんの声の内からした。そして、誰も出て来なかつた。

私は、最初の印象が、すでによくないと思った。しかし、こちらから案内を頼んだ上は、仕方がなく、

「あきまを見たいのですが」と、言った。

「おあがんなさい」と、愛想気のない調子で、おなじ声が答えた。

私は、すべりのよくない障子を開けて、窮屈な土間からかまち框へ上

った。すると、奥に頑丈そうな白髪のお婆が、恐しい眼付をして、こちらをじっと睨んでいた。

「どの間ですか」

私は、もう聞かなくてもいいような気がしたが、やはり行きがかり上から言わなければならなかった。

「二階の六畳ですから、ごらんなさい」

婆さんは、起たとうともしなかつた。

私は、家へはいると、外で見たよりも、一いっそう層陰気を感じた。

そして、急な狭い、暗い梯子段を上った。つきあたりの六畳を、これかと思つて覗いた。壁はところどころ処々壊れていた。新聞紙などが古くから貼られている、色が黄色くなっていた。そして、畳の表は、すでに幾年前に換えられたのか分らなかつた。襖でし切つてもう一間あるらしかつた。

その室は、どんな室かと思つて、私は、廊下つづきに並んでい  
るので、隣の間を覗いて見る氣になつた。高窓から、鈍い光線が  
射し込んでいた。私は、其処を覗くと同時に、苦しうなうめき  
声が起つた。蒲団を敷いて三疊の間に、女が枕を廊下の方にして、  
仰向になつて臥ねているのであつた。もう長いこと臥していると見え  
て、黒い髪の色は、つや氣がなく纏もつれていた。そして、両方の頬  
骨が高く突き出て、眼は底の方に落込んでいた。血の氣は全く失  
せて、顔の色は、白い花卉のようであつた。女は齒を露むき出して、  
痩せた体を悶もだえて、肋骨を二重に折るように、うすい蒲団の下で  
波打たせていた。

「あ——つ、あ——つ」

病婦は、他人が覗いているということを悟る筈がなかった。こうして、独り苦しんでいた。枕まくらもと許もとには、啖壺が置かれてあつた。

私は、逃げ出すようにして下へ降りた。外へ出るまでに、殆ほとんど発作的に、

「あの六畳の間ですか？」と、言った。

老婆は、冷淡な顔を上げて、やはり座つたままで、

「そのうちには、隣の三畳もあきます」と、言った。

私は、無言で外へ出た。そして、茫然として、ある戦せんりつ慄を全身に感じた。



# 青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 小川未明集 幽霊船」ちくま文庫、筑  
摩書房

2008（平成20）年8月10日第1刷発行

2010（平成22）年5月25日第2刷発行

底本の親本：「中央公論」

1923（大正12）年5月号

初出：「中央公論」

1923（大正12）年5月号

※「歩るい」と「歩い」の混在は、底本通りです。

※表題は底本では、「貸間を探《さ》がしたとき」となっています。

入力：門田裕志

校正：坂本真一

2016年6月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたっては、ボランティアの皆さんです。



# 貸間を探がしたとき

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>